

「ふあ～あ・・・」

目が覚め、一つ大あくび。  
既に誰かが開けたのか、爽やかな朝日がきらきらと部屋に舞い込んでくる。  
いつの間にか、昨日の夜感じた「視線」も消えていた。

「おや、目が覚めたようですね。おはようございます、癒癒さん。」

「おはよう癒癒お姉ちゃん！！」

「あ、おはようございます。」

「昨夜はよく眠れましたか？」

「いえ、その・・・見られてる気がして・・・」

「...ほう。悼魄はいつもより多く分け与えたようですね。余程あなたに期待しているらしい...。  
まあ、何の躊躇いもなくここへ越してくる方が珍しいのでしょうか。皆、あなたに興味を持っている  
のですよ。勿論、良い意味でね。」

「興味、ですか。」

「そうです。・・・さて、今日からあなたにもお仕事をして頂かなければ。」

「沙紅さん、その前にみんなに紹介を・・・」

「おや、そうでしたね。では癒癒さん、手早く着替えて出てきなさい。部屋の外で待っていますよ。花子、手伝って差し上げなさい。」

「はい！」

ドアが閉まり、沙紅さんが出て行った。・・・どんな仕事をすればいいんだろう？そういえば、鎧さんと獅吼さんが見あたらない。

「花子ちゃん、あの二人は？」

「え？ああ、悼兄と時兄のこと？二人なら今出かけてるよ。朝の5時ぐらいから出て、夕方に帰ってきたりするの。」

「へえ・・・何をしてるのか、知ってる？」

「えーっとね、多分悼兄は精神を鍛える修行中で、時兄はそれを見てるの。」

「え、見てるだけ、なの・・・？」

「うん。あのね、これから言うこと、誰にも言っちゃダメだよ。勿論二人にも。お姉ちゃんには特別に教えてあげる。」

「う、うん・・・何？」

少ししゃがんで聞こうとすると、花子ちゃんは私の耳にこそこそと話してくれた。

---

更新待ち。